

医療は誰のもの

地域医療構想を考える

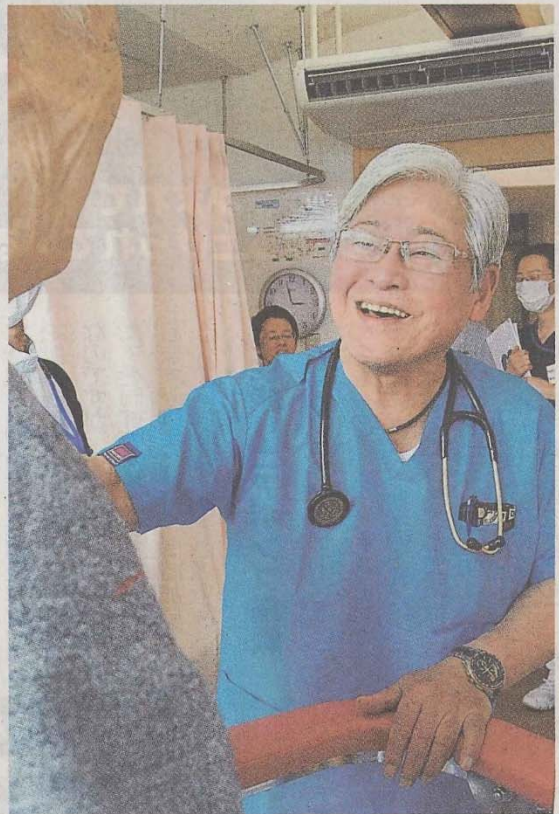
米子市河崎の真誠会セン
トラクルクリニック。扇形に
病室を配置し、霊峰大山の
四季の移り変わりが眺望で
きるよう設計さ
れた2階の病棟
(19床)で、い
つものように小
田眞院長(73)が
回診を告げた。

「表情がいい
ね。少しは動い
ているの?」。
笑顔を振りまき
ながら声掛け
し、患者のか細
い手を両手で包
む。ジョークも
交え、一緒に回
る看護師や薬剤
師、放射線技師、栄養士ら
多職種スタッフの笑いを誘
う。

② 今 有床診療所の第3部

聴診器を首に掛け、患者
と心を通わすのが小田流の
回診。「聴診器で診るだけ

が医療じゃないでしょう。
(旧知の患者は)僕から気
合を入れてもらうことを待
っているんだから」
回診前カンファレンス
で、入院患者一人一人の病
態変化は把握済み。ベッ
ドサイドでは患者の元気
度を見極め、居合わせた家



病棟回診で、笑顔で患者と接する小田眞院長。触れ合いを通して信頼関係を紡ぐ

信頼関係築き復帰促す

族の様子にも気を配る。1
988年開院以来、変わら
ない回診スタイルでもあ
る。

運動勧めベッド離脱

米子市内の大病院や総
合病院を早期退院し、なお
医療ケアが必要な患者ら
を受け入れるセントラルク
リニックの病床稼働率は高
い。2016年度は93%。

患者の入院期間を表す入院
日数は平均30日。ほぼ1カ
月以内に自宅や介護施設、
ケア付き高齢者住宅などに
復帰する。

米子市内の大学病院や総
合病院を早期退院し、なお
医療ケアが必要な患者ら
を受け入れるセントラルク
リニックの病床稼働率は高
い。2016年度は93%。

しかも「早期退院の流れ
で、受け入れる患者の重症
度傾向が顕著になってい
る」と西川悦子看護師長
(61)。心不全、腎不全、脳
血管障害、血液がん、骨粗
鬆症に伴う圧迫骨折…。認
知症や糖尿病などを伴うこ
とが多く、いきおい手厚い
総合的な医療ケアが求めら
れてくる。

その答えを導く一ツが、
ベッド離脱。回診のとき、
小田院長の口癖は「庭の花
がきれいになったら、外に
出ませんか」と誘導し、
許される範囲で積極的に運
び出す。

動を勧める。

実は、診療所と隣接する
真誠会グループの訪問リハ
ビリテーションから専門ス
タッフが訪れ、入院患者に
運動療法を提供するなどバ
ックアップ体制を敷く。40
人近いリハスタッフを束
ね、院長回診に加わる理学
療法士の大西博巳さん(52)
は、こう話す。

「入院時から病態を知り
関わることで、例えば水分
制限の患者かどうかわか
る。当然、対応が違ってく
れど、何よりも信頼関係を紡
ぐことができ、結果的に患
者の復帰意欲を引き出して
いる」

缶ビールを差し入れ

小田院長の回診は1時間
近くにも及んだ。合間には、
手足にチアノーゼが出現し
た終末期の高齢患者の家族
に「大病院で働いていた頃
の対象は検体。患者の顔は
見えなかった。ここは19床
のクリニックだけど、中身
がとても濃密。初めて医療
に携わっているんだと実感
しています」と一。
(米子総局報道部・山根
行雄)

毎週土曜掲載